

今朝のクリスマスは、あなた方に音楽を作ることを勧めたい。

(ジングルベル) 毎回、あなた方が聞くのは栄光の言葉である。

私たちは、特に主の栄光を求めているのだ。そうである。

これはある意味では、誕生祝いであることに気付かされる。

主なるイエス・キリストの誕生を祝うこと。2021年の祝い。

今年は大変な年である。私たちは祝っているが、その一方ではBC州のコロナ感染が突出し、インフレが上昇し、世界では政治の不安定さが急増している。困難な年であると思う。なぜなら私たちは祝っているべきであるのに、本当は憂いているように思えるからだ。この世を憂う、愛する人々を憂う。今週、私は説教を書いているのだが、親戚の二人が手術を受けている。私だけではないことを理解している。今、多くの私たちは心配する人々を抱えている。

キリスト者の友よ、みなさんをととても特別な形の祝いに招きたい。

祝いと賛美の方法は、キリスト者に何世紀にも渡って知られている。

今のあなた自身のすべてを差し出そう。憂いと恐れ、すべての悲しみと苦痛を認めよう。

すべてのみなさんは、ここで喜んで受け入れられている。

そして祝うと同時に、主の栄光を喜びをもって賛美するのだ。

私は再び告げる。今のあなた自身のすべてを(神のみ前に)差し出そう。

私たちの心が暗闇であっても、光の中にあっても、聖書に向き合うのだ。

なぜなら誕生した赤ん坊のそれ以上の何かを祝っているのだ。

イエスの誕生、新しい時代の鐘が鳴る。

その古き時代はローマ帝国がすべてであった。皇帝たちは神々であることを宣言した。そしてすべての権威、すべての権力を使って税金を収集した。それが住民登録の目的であった。この物語は、世にあるすべてが登録される描写で始まる。(ルカ2:1-3)

すべての人が数えられ、皇帝は効率的に税金を収集することができた。

財貨、人々、資源は、シリアのような州から送り出された。

これらの税金はローマに送られ、皇帝は友人や家族と共に金の玉座に座り、

王室の礼服をまとい、柔らかいベットの備わる華やかな部屋で眠った。

ローマ帝国の栄光は壮大な光景であった。

信じがたい代償。ローマは、税金収集も含め、課した命令を執行するために強大な武力を使った。私が読んだ歴史の粗筋では、アウグストゥス・カエサルは、何万人もの殺戮命令を出した直接の責任者である。直接命令である。ローマの栄光は極度の犠牲からである。特にこの推測は、奴隷や一般的に（戦争で重傷を負って）障害者になった人々や、あるいはアウグストゥス・カエサルが直接関与しなかった戦争（犠牲者）は含まれていない。

そこまでだ、牧師さん、と思っているかもしれない。この美しいクリスマスの朝に、ベルを鳴らしてよい時を過ごしていたのだ。絶望的でもなく、心配することでもない。もう少し楽しい誕生日パーティを続けよう。そうではないか？

私が始めたのではない。今日の福音書である。この聖句はカイサルと税金で始まった。この聖句は私たちに、ローマは権力と栄光を求める人間の欲望であると気付かされる。ある時は、暗闇を経験した後にのみ光を見ることができる。光は暗闇に輝く。

この節は、幼子の直接的な（ローマとの）対照である。

馬小屋で生まれ、質素な布に包まれ、飼い葉桶に寝かされている。

一方私たちは、（王の）贅沢な生活を知っている。ローマのカイサル・アウグストゥス、シリアのクワイレイナス、あるいはエルサレムのヘロデ王の生活である。

特にこの節ではダビデを取り上げている。ダビデ王を覚えているだろうか。

神はダビデ王に約束された『あなたの家、あなたの王国は、とこしえに続く』（サムエル記下7:16）。この節はヨセフがダビデの家系であることを、私たちに2度、気付かせる。

マリアとヨセフはベツレヘムというダビデの町にいる。

古代の王たちの家系であるこの子供は、古代の王たちの街で生まれたかもしれない。国家の長たちが立ち会い、シルクとサテンに包まれ、金のゆり籠に寝かせる王の誕生とは違っている。この子供の誕生は、畜舎の動物によって見つめられ、手に入る布で包まれ、飼い葉桶に寝かされていた。その対比を見ることができる。

帝国と税金の物語から始めることによって、この誕生の違いを見ることができる。

人間の栄光は帝国の強大な華麗さに存在し、神の栄光は飼い葉桶の子供に存在する。

神の栄光がどこに存在するかを探す時がある。

神の栄光は羊飼いと共に存在するのが見える。

神の栄光は、地面に横たわって眠り、汚れたマントの布に包まり、野外の星空の下で存在する人々に現れる。

『主の使いが彼らの（羊飼い）ところに来て、主の栄光が回りを照らした』（ルカ2:9）。

その光景はどのようであったかと考えるのか？

主の栄光。

教会ではこれを何度も唱えている（気が付いたかもしれない）。
詩編は神の栄光であふれている。詩編24は神を『栄光の王』と名付けている（詩編24:10）。
聖餐式の祈りで、神の栄光を祝い、そして賛美することを告げられている。
栄光とは何を意味するのか？

想像するかも知れないが、「栄光」という言葉は多くの意味を含んでいる。
ヘブライ語の言葉で *dkabod*(*kaw-dode*) と言うのだが、根本的な意味は「重さ」である。
これは「栄光の意味の重さ」という言葉である。それは無限であり、豊富であり、
壮麗であり、誉れである。*dkabod*は神の人々によって経験される。

『主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた』と
出エジプト記で述べられている。ある時は神の栄光が火のように見える。
神の栄光の重さに直面して畏れることは、適切であり道理に適っている。
超偉大な神を垣間見て、私たちは畏れる。

ギリシャ語に *doxa* という言葉があるのだが、（聖書に）何百回と出てきている。
それは栄光ある、名誉あるという意味、すなわち賛美することである。
この言葉の意味は、尊さを歌い、礼拝することである。この言葉は輝きや明るさと繋がる。
しかしこの輝きは、居心地のよい暖炉で喜んで受け入れる燃えるような色ではない。
神の栄光は、月、太陽、そして星のような猛烈な輝きである。

栄光は正しく神とイエスに属している。パウロは言う「『闇から光が輝きでよ』と命じら
れた神は、私たちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を
与えて下さいました」（コリントの信徒への手紙2、4章6節）。

よく考えたのであるが、太陽の途方もない輝きのように、神の栄光は畏れる賜物である。
主の栄光は羊飼いに現れ、彼らはひどく恐れた。すべては火のように輝き、
すべては重厚な壮麗さであった。羊飼いは恐れた。しかしある程度の恐れである。
なぜなら彼らは暗闇と、世の王たちや帝国の危険な栄光に慣れていた。
野宿している羊飼いは、この賜物を受け取った。そして彼らは恐れた。

そうである、私たちは神の栄光を畏れるのだ。しかし神の栄光は美しくもある。
現代の神秘論者の *Thomas Merton* は、神の栄光を経験する。
彼は言う、「全世界は神の栄光で課せられている。私は足の下に火と音楽を感じる」
(*Thomas Merton, the Sign of Jonas* p228)。

「神の栄光は世に現れ、御使いは言った『恐れるな』」（ルカ2:10）。
御使いは羊飼いに、音楽のような美しさを見るように勧めた。御使いは歌う、
「わたしは喜ばしい知らせを持ってきた。それはすべての人々に大きな喜びをもたらす」。

皇帝たちと税金で始まる聖書の箇所は、もう一方の対比である。
新しい王の王の光を見る。それは新しい権威の一種である。

（王たちの）栄光とは異なるものである。
従って『御心かなに適う人に平和があるように』と書かれてある。
闇と光を比較して、私たちは光を見るように招かれている。
よい知らせと喜びは、権力の座にある人々にのみ存在した。
それはローマ帝国の王たちや巨大企業の人々だ。
しかし今日、神の恩寵は、人間のどの権力の上にも宿らないことを覚えて祝うのだ。
神の恩寵は、裕福な人や権力者のために備えられているのではない。
今日、このよい知らせはすべての人々のためであり、大きな喜びを祝うのである。
そして私たちは唱える—

いと高きところには神の栄光、栄光がすべての世に現れますように。
この地に、ここに、神の栄光の時代を祝う鐘を鳴らそう。

（文責長澤猛）